【演題;20】 臨床研究

# 大動脈プラークを有する患者の生命予後および塞栓性イベント発生率と内服薬による効果

天理よろづ相談所病院　循環器内科
西賀　雅隆、泉　知里、中島　誠子、山尾　一哉、坂本　二郎、花澤　康司、三宅　誠
田村　俊寛、近藤　博和、本岡　眞琴、貝谷　和昭、中川　義久

**背景**:大動脈弓部に高度プラークを有する患者への適切な内服管理は確立されていない。今回の目的は、これらの患者の予後や塞栓性イベント発生率と、それに対する内服薬の効果を調べることである。

**方法**:1995～2005 年に経食道心エコーを施行された連続 1401 例を対象とし、そのうち高度大動脈プラーク(厚さ 5mm 以上)を有する患者の生命予後・イベント(脳梗塞、末梢塞栓症、突然死)発生率、および抗血小板療法／抗凝固療法／脂質低下療法との関係について検討した。

**結果**:1401 例中 75 例(5.4%)で高度大動脈プラークを認めた(中央観察期間 5.9 年間)。75 例の予後およびイベント発生率はコントロール群と比較して有意に不良(5 年生存率 69% vs 94%、5 年間非イベント率 67% vs 95%)であった。
イベント群と非イベント群の背景を比較すると、イベント既往・心房細動・人工透析がイベント群で有意に多かった。
内服薬では、抗血小板薬とスタチンは良好な生命予後との関連を認めた(抗血小板 hazard ratio: 0.38, 95%CI: 0.20-0.72, p=0.03、スタチン hazard ratio: 0.33, 95%CI: 0.17-0.65, p=0.002)が、イベント発生率に有意差がなかった。一方、抗凝固療法は予後やイベント発生率を改善しなかった。

**結語**:抗血小板薬およびスタチンは高度大動脈プラーク患者の予後を改善させる可能性がある。